

第四次海士町総合振興計画 別冊 2009-2018
海士町をつくる24の提案

町長あいさつ

「島の幸福論」を語り合おう。

平成21年4月から、新たに第四次海士町総合振興計画のもと、海士町のまちづくりがはじまります。前回の第三次海士町総合振興計画では、「キンニャモニャの変」として、人づくり、モノづくり、健康づくりを柱にまちづくりを進めてきました。その結果、島のブランド化や新たな起業家の誕生など、新しい島型ビジネスを生み出すことができました。

こうした成果を踏まえ、さらに海士町のまちづくりを発展させるため、第四次海士町総合振興計画では「島の幸福論」をテーマにかかげました。これは住民の「自分たちの島は自ら築く」という挑戦の意志と一人ひとりが足元から小さな幸福を積み上げ「海士らしい笑顔の追求」をしようという思いが込められています。

今回の総合振興計画策定とその別冊である『海士町をつくる24の提案』の制作には、約50人の住民のみなさんが参加してくれました。これは、海士町40年の歴史上、初めての試みです。島に住む一人として、生活の中で実感する課題は何なのか、それを克服し幸せを実感するにはどうしたらいいのか、議論を重ねて、島を幸福にするアイデアをこの一冊の本にまとめました。

50人の輪が、100人の輪となり、1000人の輪となり、多くの方がまちづくりに挑戦し、「島に生きる幸せ」を実感してくれることを願っています。

2009年4月吉日

海士町長 山内道雄

はじめに



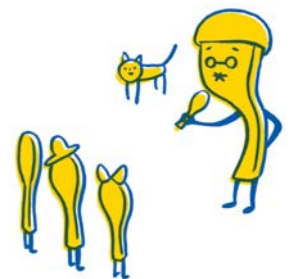
海士町では、10年に一度「総合振興計画」をつくっています。これは今後10年、海士町はどんな町を目指すのか、それを実現させるためにはどうすればいいのか、さまざまな分野にわたって計画を練ったもので、海士町の行政はこの計画に基づいて運営されています。過去には平成元年に「クオリティ・ライフへの出発」、平成11年には「キンニャモニャの変」をテーマとした海士町総合振興計画をつくりました。観光施設などの基盤整備、特産品の開発や地域のブランド化、それらに関わる人材育成など、この総合振興計画による成果は多岐にわたっています。

そして今回、新たにまとめられた第四次海士町総合振興計画のテーマは「島の幸福論」です。これまでの計画を継承しつつ、新たな時代の流れや海士町が抱える課題に対応した、持続可能な島の実現を目指すことに加え、住民一人ひとりの「幸せ」が大きなテーマになっています。海士町に住むことで、いかに幸せを感じられるか——。物質的豊かさと、先の見えない不安が背中合わせの現代だからこそ、これからのまちづくりには「住民の幸せの追求」が重要だと考えました。

住民一人ひとりが「幸せ」を実感できる町、海士町。そのまちづくりの第一歩として、昨年2008年、公募による住民と役場の若手職員を合わせた約50名で構成された「海士町の未来をつくる会」が結成されました。幾たびの話し合いを重ね、総合振興計画の素案を作成。住民の声を反映した第四次海士町総合振興計画を完成させました。さらに今回は、住民が計画づくりに参画するだけでなく、その後のまちづくりにも参画する仕組みを盛り込んでいます。これは海士町初の試みです。

この『海士町をつくる24の提案』は、第四次海士町総合振興計画の住民向けの別冊としてつくられました。住民一人ひとりがまちづくりに参加し、「海士町に住む幸せ」を実現するためにはどうしたらいいのか、そのガイドブックの役割を担っています。

「海士町に住んでよかった」「海士町に住み続けたい」。ひとりでも多くの住民が、そう感じられる海士町にするために、ひとりでもできること、10人でできること、100人でできることなど、人数別にまちづくりのアイデアが提案されています。まちづくりの主人公は住民です。さあ、この本を片手に未来の海士町を一緒につくりましょう。



もくじ



03	町長あいさつ
04	はじめに
08	海士町は素晴らしい！
10	海士町の自慢
12	今、海士町がかかえる問題
16	海士町の未来を描こう
18	まちづくりなんてできないと思っている人へ
20	この本の使い方

22 1人でできること

24	01 歩いて暮らそう
26	02 天職を見つけよう
28	03 海士の味をうけつごう
30	04 もっと水を大切に！
32	05 もったいない市場
34	06 エネルギーを見直そう
36	コラム1

38 10人でできること

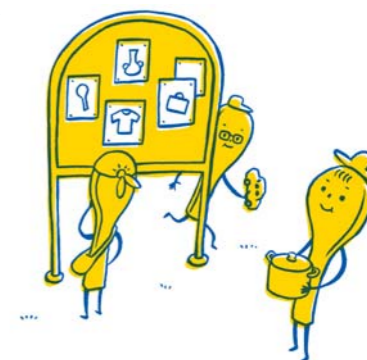
40	07 海士人宿につどおう
42	08 ガキ大将を育てよう
44	09 あまさん倶楽部
46	10 海士ワーキングホリデー事業
48	11 ワゴンショップ海士号
50	12 おさそい屋さんになろう
52	コラム2

54 100人でできること

56	13 ちいさな農のある暮らし
58	14 炭焼きクラブ「鎮竹林」
60	15 A M A 情報局を開局しよう
62	16 欲しいものは島でつくる
64	17 支えあって暮らそう
66	18 地域に「ただいま」を言おう
68	19 里山と里海をつくろう
70	20 みんなで学ぶ島のエコ
72	コラム3

74 1000人でできること

76	21 地域が支える学校づくり
78	22 魅力ある島前高校をつくろう
80	23 海士大学に入学しよう
82	24 海士まちづくり基金
84	提案をかたちにするために
86	役場のリーダーと相談と支援の窓口
88	アイデアをかたちにする5つのステップ
90	海士町総合振興計画本編との対応表
92	この本ができるまで
96	海士町まちづくり提案書



海士町は素晴らしい！ あたりまえと知っていることが 実はとっても贅沢でした。

いつも見ている青い海、山から流れるきれいな水。
ご近所さんは顔なじみ、山海の幸も豊かな島——。
あたりまえだと思っている風景や日常も、
あらためて見つめ直すと、いかに素晴らしいものかわかるはず。
あなたの好きな海士町はどんなところですか？



🚩 = 海水浴場





海士町の自慢 1

ほぼみんな顔見知り

海士町の人口は約2,400人。顔を見ただけで、どこの子どもなのか、両親はどんな人なのか、どんな仕事をしているのかなど、なんでもわかってしまいます。また、海士町に住みはじめてまだ間もない人のことも、みんなとても興味を持って見えています。早く海士町に馴染むためには、区会へ入ったり、地域や町内の清掃活動に参加すれば、すぐにみんな顔見知りになります。



海士町の自慢 2

犯罪がない

海士町では、家に鍵をかけると「何かあったときにどうすっだ!」と怒られます。みんな顔見知りだからこそ、鍵をかけないほうが便利なお客さんがたくさんあります。雨が降ったときの洗濯物、おすそ分け、宅配便の受け取りなど、近所との密なお付き合いによって便利で安全な暮らしができるのです。



海士町の自慢 3

家にカニが来る

海士町には、アカテガニという小さなカニがたくさん住んでいます。このカニは、少ない水で生きていけること、高いところに上る習性があることから、川沿いの家や海沿いの家の中によく入ってきます。満月になるとアカテガニが大群で海に向かう様子を見ることもできます。小さなお客様の訪問に、豊かな自然と共に暮らしていることを実感できます。



海士町の自慢 4

島なのに水が豊富

一般的に離島は水の確保に苦労していますが、海士町は昔から水が豊富で水の確保に苦労しませんでした。保々見にある「天川の水」は、環境省指定の名水百選にも選ばれており、その水量は一日400トンにもなるそう。水が豊かなので稲作も盛んです。米の島内自給率は120パーセントを越えており、海士の米は、隣の西ノ島町や知夫村などでも食べられています。



海士町の自慢 5

若者が民謡を歌い踊れる

海士町には「キンチャモニャ」という隠岐民謡があります。「キンチャモニャ」は、しゃもじをもって、三味線の音にあわせて踊ります。キンチャモニャ祭では、小さな子どもからお年寄りまで全員が踊ることができます。また、ほとんどの若者もこの民謡を歌ったり、踊ったりすることができます。宴会などは、必ずこの踊りでしめます。



海士町の自慢 6

ウミウシは食材

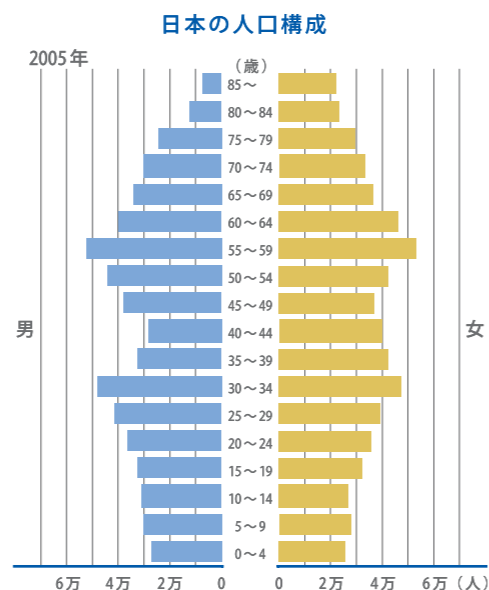
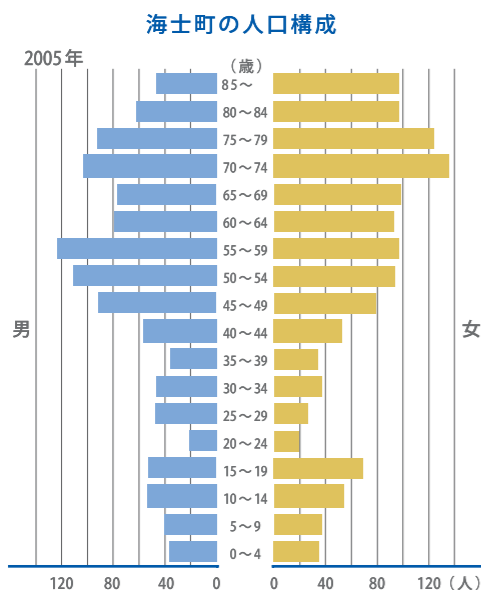
海士町や隠岐では、ウミウシ(ベコ)を食べる習慣があります。ウミウシとは、軟体動物で貝の消失した生物の総称で、ゆでてもみ洗いし、煮つけにしたり、酢の物にして食べます。煮つけは、弾力があり、旨味も感じられます。酢の物は、やわらかい食感で味はほとんどありません。ウミウシを食べようという先人は勇気がありました。

今、海士町がかかえる問題。

1

人口減少。
とりわけ20～30代の若者の減少は、島の死活問題です。

2004年、日本の人口は1億2,783万人をピークに減りはじめました。2050年には、1億59万人まで減るといわれ^(*1)、この速度は、他の先進国でも体験したことのないものだそうです。海士町でも、これを上回る速度で人口減少が進んでいます。現在の海士町の人口は約2,400人(2008年)ですが、2030年には約1,300人と、今後20年余りで現在の約半分にまで減少すると予想されています。特に就業機会の少ない離島である海士町では、20～30代の若者の人口流出が激しく、他の地域に比べても、この年齢層の人口減少が進んでいます。この年齢層は、島の経済を担い、子どもを育てる人たちです。若者にとっても住み続けられ、住みたくなる島とはどんな島なのでしょうか。想像してみてください。



出典：国立社会保障・人口問題研究所

2

少子高齢化。
海士町の5人に2人が
65歳以上の高齢者です。

海士町の高齢化率(65歳以上の高齢者の割合)は2008年で39.4%となりました。全国平均が22%ですから、非常に高齢化が進んだまちといえます。一方、出生率かというと、人口1,000人あたり2006年に2.7人と全国平均8.8人を大きく下回っています。少子高齢化と一言でいってしまえばそれまでですが、海士町の14の集落のうち、4集落の高齢化率が50%を超えており、このままでは集落そのものの維持に影響を及ぼす可能性があります。大勢のお年寄りを支えるだけの人手もお金もないとき、どうすればいいか。それでもお年寄りが幸せな暮らしをするためには、どうすればいいのか。今、考える必要があります。

3

大量生産・大量消費・大量廃棄の
社会は
もう限界です。

日本を含めた先進国の産業は、大量生産・大量消費のシステムによって成長してきました。生活必需品が不足していた時代には、大量生産はモノを安く多くの人に行き渡らせる有効なシステムでした。しかし、それを続けた結果、大量のゴミを生み出し、大量の資源を浪費しつつける社会になってしまいました。こうした大量生産を支えてきた安い石油も、世界での需要が供給を上回る「ピークオイル」^(*2)によって、今までのようには使えなくなるといわれています。値段は上がり、輸入量も激減するかもしれませんし、いつの日か、枯渇する日もやってきます。こうした地下資源や森林などの自然資源を消費し、廃棄する一方通行の産業構造は、もはや限界にきているのです。

そこで、注目したいのが、限りある資源を守り、育てながら有効に活用する循環型の産業です。ありがたいことに海士町には海や山、たくさんの自然資源が残されています。この環境の中でこそできる産業とはどんなものでしょう？新たな産業のあり方が求められています。

4

地球温暖化問題。 海士町の暮らしも 世界に影響しています。

ここ数年でよく耳にするようになった「地球温暖化問題」。この問題も海士町と無縁ではありません。地球温暖化問題とは、化石燃料(石油や石炭など)を大量に消費することで、大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスが増え、気温が上がり、自然環境や人類の生活に破壊的な影響を与えるというものです。この地球温暖化を防ぐには、二酸化炭素などの排出を減らしていく必要があります。

二酸化炭素は、暮らしのさまざまな場面で排出されています。例えば、車に乗ったり、ゴミを焼却したりすることも、二酸化炭素の排出源になります。また遠い国からの輸入も、輸送するときにたくさんの二酸化炭素を排出しています。こうした視点から考えると、島でとれたものを島で消費する「地産地消」は、二酸化炭素排出を減らすことに一役かってくれる活動にもなります。私たち一人ひとりが、地球全体の環境問題を意識した暮らしを考える時代になったのです。

5

山・海・人はつながっています。 人手不足と無関心が引き起こす 環境問題。

海士町でも間伐などの手入れの行き届かない山林や、休耕地(使われていない田畑)などが、年々増えています。農業や林業にたずさわる人の高齢化で手に負えなくなったり、手間がかかる割には収入に結びつかないなどが理由です。

荒廃地の増加は、単なる山や畑の問題に留まりません。間伐が行われない山では、十分な光を得ることができず、ヒョロヒョロと細く弱い木しか育ちません。弱い木はしっかり根を張ることができず、倒れてしまいます。こうした山林は、土砂崩れを起こしやすく、さらにはその土砂が海をにごらせてしまうことにもつながります。そうなれば、海の魚にも影響し、漁業も打撃を受ける可能性があります。また同様に、私たちの生活排水も土壌や川、海

を汚す原因になっています。

海や山、人の暮らしはすべてがつながっています。この美しい自然こそが最大の資源である海士町だからこそ、そこから恵みをいただくには、手入れをし、大切に保護していく必要があるのです。

6

行政主導の まちづくりは 限界です。

今までまちづくりは、行政が主導して計画を練り、運営をしてきました。しかし、社会が成熟し、海士町に住む私たちの暮らしも多様化しています。少子高齢化や地球環境問題など、今までにない問題もでてきました。こうした状況にきめ細やかに対応するには、いままでの行政主導の力だけでは充分とはいえません。また、昨今の財政状況の悪化など、地方自治体を取り巻く環境は厳しいのが現状です。

そこで、必要となってくるのが、住民の力です。物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさが重視される今、さまざまな学び方や働き方、趣味や夢、生きがいなどが追求できる社会が求められています。そのためにも、住民の一人ひとりが新しいまちづくりの方法を知り、参加することが不可欠なのです。ずっと住み続けたい海士町とはどんなものでしょうか、それを実現させるためにはどうしたらいいのでしょうか。すべての住民の協力が必要です。

*1 国立社会保障・人口問題研究所らべ。

*2 ピークオイル：石油などの化石燃料の生産が、21世紀の中頃までにピーク(頂点)を迎え、その後は減衰していくという考え方。IEA(国際エネルギー機関)は、在来型の石油生産量は、標準的なシナリオでは2028年から2032年にピークを迎えるとしているが、悲観的な見方では2013年から2017年にピークが来るとしている。

海士町の未来を描こう。

今回まとめられた第四次総合振興計画のテーマは、「島の幸福論」です。海士町は、今後10年をかけて、島ならではの幸せを追求し、住民一人ひとりが幸福を実現できる社会を目指すことを決めました。

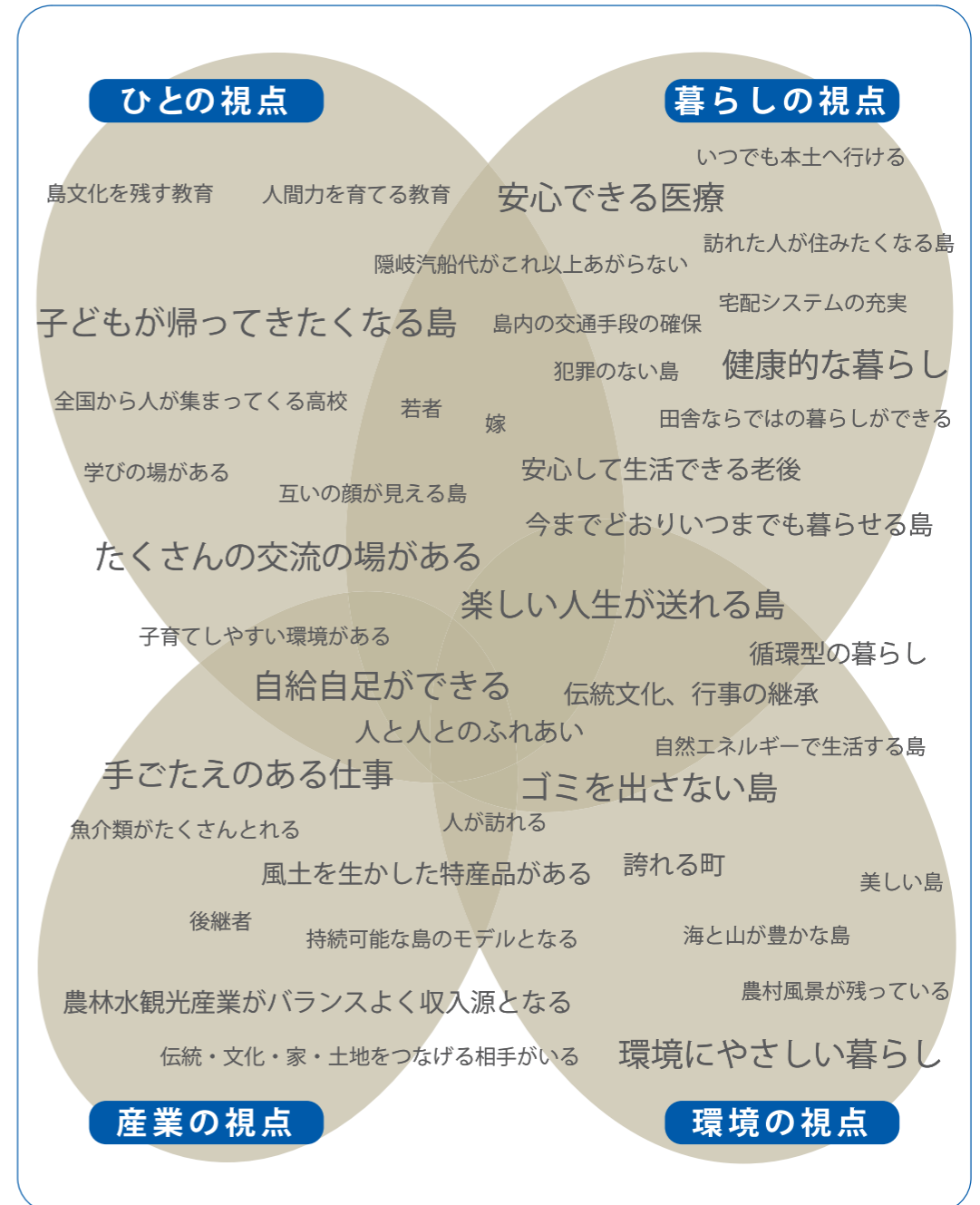
では、島に生きる私たちにとっての「幸せ」とはなんですか？

第四次総合振興計画をつくるにあたって、「海士町の未来をつくる会」を結成し、多数の住民が海士町の将来について語り合いました。

その結果、私たち海士町の住民は、今や都市では手に入れることができなくなった、多くのことを大切にしていることに気づきました。

海士町に住んでいるからこそ生まれてくる笑顔、海士町に住んでいるから感じられる幸福とはどんなものなのでしょう。まずは私たち一人ひとりが、海士町に住む幸福について考えることが必要です。そしてさらに、海士町の住民どうしと一緒に、幸せを感じあえる、分けあえる町にするにはどうしたらいいか考えることも必要です。海士町にはさまざまな課題があります。その課題をどう解決していくのかも考えなくてはなりません。一緒に知恵を出し、一緒に汗をかいて、一緒に笑いながら、よりよい明日をつくっていく。それこそが、まちづくりの本来の姿なのです。

住民の声



海士町の未来を考える会（第四次海士町総合振興計画の策定に関する住民説明会より）

まちづくりなんて
できないと思っている人へ。

問 まちづくりは行政の仕事でしょ？

答 海士町のかかえる問題でも紹介しましたが、行政だけでまちづくりをすることは困難になってきました。海士町の税収は年々減っています。役所の職員も減っています。一方で、高齢者が増え、現場で活躍してくれるはずの若者は減っています。多種多様になった住民のニーズに応え、みんなが快適に暮らしていくには、支えあいの精神のもと、住民がまちづくりに参加することが不可欠です。

問 まちづくりができるような
資格や能力がありません。

答 まちづくりに参加するのに、何か資格や特別な能力は必要ありません。どんな人でも好きなこと、得意なことがあるはずです。まずは自分が興味のある分野に参加することをおすすめします。またこの本では、ひとりからはじめられるまちづくりのアイデアも提案しています。

問 まちづくりなんて一部の人だけの
ものなんじゃない？

答 現在、海士町のまちづくりに参加している人は、約50人います。この50人が、7人の人に声をかければ350人。さらに350人の人が7人に声をかければ、ほぼ全員の住民がまちづくりに参加することになります。まちづくりに参加することで、参加しないよりも、海士町での暮らしが楽しくなるはずです。

問 活動資金はどうするのですか？

答 今回提案されているまちづくりのアイデアの実現には、行政も一緒に活動し、金銭的支援も行っていくことになっています。また今後、あらたなまちづくりの活動を支援していくために、「海士町まちづくり基金(仮)」の設立を予定しています。

問 幸せってみんなそれぞれ
違うんじゃないですか？

答 個人の幸福感はひとそれぞれ違うかもしれません。今回、海士町が目指すのは「海士ならではの笑顔の追求」です。この島で生きてゆく上で、どうしたら多くの人々が「幸せ」を感じられるかを考えていきたいと思っています。そのためにも今後、住民への「幸福度調査」を定期的に行いたいと考えています。

この本の使い方。

この本では、海士町のさまざまな課題の解決と住民の幸せの追求を目指し、まちづくりのアイデアを提案しています。ひとつひとつのアイデアは、「海士町の未来をつくる会」による24回の話し合いから出てきたものです。ひとりで簡単にできそうなことから、家族や友達とできそうなこと、地域でできること、海士町全体でできることを紹介しています。まずはこの本を眺めて、海士町の未来について話題にしてください。そして、あなたのできることは何か考えてみてください。

- 1 **タイトル** — みんなではじめたいまちづくりの提案です。
- 2 **本文** — どうしてこんな提案が生まれたのかその背景と、やってみるとどんな効果があるのかを説明しています。
- 3 **注釈** — 提案の理解を深めるのに役に立つ本や資料の紹介、わかりにくい言葉を説明しています。
- 4 **人数** — 何人からはじめられるかがわかります。
- 5 **イラスト** — 海士町の未来をイメージできます。

1 タイトル

01 クルマでは出会えない 人や時間をもう一度！ 歩いて暮らそう。

島に住む私たちは、近所にも車で行くほど、車に依存しています。車は便利な乗り物ですが、歩く習慣を失うことは、2つの問題につながります。それは、健康と環境です。

多くの生活習慣病の原因のひとつは運動不足。健康づくりのために、歩くことから始めてみませんか？自分のペースにあわせて、歩く時間、歩く日を決めたり、仲間との散歩や歩くイベントを企画してみるのも楽しいもので

参考文献
『クルマを捨てて歩く！』 杉田 聡 著（講談社プラスアルファ新書）

24

2 本文

3 注釈

4 人数

5 イラスト

3 注釈

す。また、「行きはいいけど、帰りは疲れて歩けない」といった時は、バスを利用したり、ヒッチハイクができるようになると、歩く人も増えるかもしれません。

よく歩くことは、ガソリン代の節約にもなります。これからさらに高騰する可能性があるガソリン。温暖化をはじめとした地球環境悪化を防ぐためにも、エネルギーの節約は重要な課題です。

歩く暮らしをみんなですれば、見えていなかった風景を発見したり、人との出会いや交流も生まれます。ゆっくりながれる時間を持つこと。それは、毎日の暮らしを豊かにし、まちの雰囲気を変えることにもつながるのです。

役場の健康福祉課には、ウォーキングマップがあります。ぜひ活用してみてください。

用語解説
ヒッチハイク………通りがかりのクルマに無料で乗せてもらうこと
ウォーキングマップ……平成14年に作成されたマップであるため、道路の一部が古いままになっている。

25